

## 学長 巻頭言

### 論理的な文章を—吉村昭『光る壁画』から

一篇の文章には、一本の論理が全体に貫かれていなければならない。当たり前のことだが、これをおろそかにした文章が少なくない。面白いことがいろいろ散りばめられてはいるのだが、全体を通じて著者が何を主張したいのか、その論点が不鮮明な印象の薄い文章が多い。なにがしか固有の見解を求めて書物をひもどく読者にとって、論理性の薄い文章を読まされることほど腹立たしいことはない。

読むのに要した時間を返してくれ、と叫び声をあげたくなった経験をもつ人は少なくないのではないかな。

もっとも、論理の整合性といっても、重々しく積み上げられた城壁のような、寸分違わぬ構成が必要だといっているわけではない。あまりに重厚な論理構成には、読者は容易に近づいてくれない。書き手のなかにゆるぎのない論理構成が想定されているかどうかを、ここでは問うているのである。この想定が十分であればこそ、主題に関連する雑多な材料やら自分の経験やらを幾重にも取り入れて文章にふくよかさを与え、奥行きのある味わいをにじませることができるのだと思う。一貫した論理性を背後にもつ文章であれば、雑多な素材を持ち込んでも、決してそれらが雑多な感じを読者に与えることはないのである。

吉村昭氏に『光る壁画』（新潮社）というタイトルのノンフィクションがある。人間の体内にカメラを持ち込んで病巣部を撮影しようという、現在では当たり前の技術だが、往時にあってはとてつもない着想を、数々の困難を克服しながらついに現実のものとした医師と技術者たちの熱い苦闘の物語である。

このノンフィクションは、技術者である主人公の曾根がその経営を妻にまかせている箱根芦ノ湖の旅館の本宅で休暇を過ごし、カメラ会社勤務のために滞在している東京渋谷の下宿にもどっていくシーンから始まる。小涌谷から登山鉄道で小田原に着き、小田急線に乗り換えて渋谷に向かう。小田原駅のベンチで電車を待つ間に妻との過去が語られ、小田原をでて車窓に映る箱根の連山を背景に曾根がカメラ会社で仕事をすることになった経緯が語られる。箱根の連山が消えて平野部に田畠が広がるところにきて、全体のストーリーに不可欠のもう一つの話がでてきて、そうした回想のいくつかを重ねていって電車が渋谷に到着する。

小涌谷から小田原を経て渋谷に着くまでの、次々と映し出される車窓の情景の変化をからませて、曾根の複雑な経歴や心境が多様に描写されているのだが、この物語ではそうした複雑さが少しもわずらわしくない。むしろリズムカルである。吉村氏の巧妙なテクニックのゆえであろう。レールの上を走る電車を舞台に雑多な材料がいかにもうまく配されている。電車がレールの上を走っているという一貫性のある確かな感覚を読者に与え、そうして錯綜した内容を自在に展開しているのである。このノンフィクションの電車のレールに象徴されるものが、私のいう論理の一貫性である。



学長 渡辺 利夫  
(国際開発学部教授)

(以上)